

第21回全日本フルコンタクト・テコンドー選手権大会の見所

組手無差別級の見所

小山恭弘、鈴木雅博、八幡直明、古谷知也の4強の争い

組手無差別級の優勝候補は、すでに告知しているチャンピオン対決、小山恭弘（横浜鶴見テコンドークラブ）対 鈴木雅博（湘南平塚テコンドークラブ）戦の勝者と予選会の第12回関東大会、第22回全日本学生大会、第8回関西大会における 部重量級において3大会連続優勝を果たしている八幡直明（神奈川大学湘南校体育会テコンドー部）、前年度全日本大会準優勝者の古谷知也（高知テコンドークラブ長）の4強のいずれかが優勝する可能性が高い。

だが、4強のいずれにも、当代最強王者だった尾崎圭司及び斉藤健のような不動の強さがない。そこで波乱も十分予想される。

伏兵として注目されるのが、重い後ろ横蹴りをもつ川崎一輝（神奈川大学横浜校体育会テコンドー部）とベテランの井上鉄朗（千葉船橋テコンドークラブ長）である。ただ、川崎、井上いずれもスタミナに問題があるため、持久戦に持ち込まれると厳しいものがある。不動の王者が存在しない中、実力伯仲の蹴美の熱戦に期待してほしい。

女子組手無差別級の見所

高橋三恵の3連覇達成を阻む者は誰か！？

女子組手無差別級は、順当に行けば高橋三恵（東京港テコンドークラブ）の3連覇となる可能性が高い。本来、高橋は、他流試合やプロキックボクシング等で成果をあげているJTA男子選手同様、顔面強打有りの女子打撃系格闘技選手との他流試合を予定し、打撃力の強化に磨きをかけていた。しかし、顔面強打有りルールを採用しているのは、プロ・アマいずれも40kg台の軽い階級しか存在しないため他流試合を断念せざるを得なかった。

高橋にも不安要因がある。

本年度は、他流試合のための打撃力強化を目的としたパワー・トレーニングを強化したため、蹴り技の練習量が落ち、蹴りの威力が前大会より落ちているからだ。

ここに死角がある。

JTAフルコンタクト・テコンドー・ルールは、

中段への突きによる一本勝ちを認めているが、顔面強打による一本勝ちを認めてはいない。

流派の技術的生命線と言える蹴美・蹴武の要件を満たす華麗な蹴技で雌雄を決しなければならないのだ。

相手選手が高橋の蹴りを完璧に防御し、延長戦にもつれこめば充分勝機がある。

本大会は順当に行けば女子選手としては大柄の新人2名が、1～2回戦で高橋に挑戦することになる。

不動の女子チャンピオンに対する新人達の活躍に注目したい。

決勝戦は、悲願の初優勝に燃えている松兼ひとみ（東京港テコンドークラブ）との対決になるだろう。

両者は本年度の予選会で対決。松兼が判定勝ちを納めており、高橋に立ちはだかるだろう。

蹴武の型試合の見所

蹴武型の鬼・植田博和の返り咲き優勝か！？ 蹴武型のプリンス・野村修一の忠武型の完成度が勝敗の分かれ目

「動」の組手試合の対極にあるのが「静」の蹴武型試合である。
JTA独自の型である蹴武の型は、3年前に全日本大会正式種目として採用された。
初代チャンピオンは、植田博和（東京江東テコンドークラブ長）であった。
翌年の全日本大会でも2連覇は固いと予想されていたが、植田が思わぬ不調で大波乱が起きた。

「優勝をさらった」という表現が適切だったのが、
蹴武型の新星・野村修一（岡山備前テコンドークラブ長）である。
野村は、蹴武型の実力者・妹尾将吾の岡山テコンドークラブ開設以来の第1期生の弟子。
妹尾は、蹴武型創始者・河明生会長の二人しか存在しない内弟子。
JTA蹴武型の系譜からみると、野村は「蹴武型のプリンス」とみなせるのだ。
当然、野村は2連覇を狙っている。
だが、野村には不安要因がある。
前年度全日本大会優勝以来、予選会に出場していないことから1年間も実戦から遠ざかっていることだ。

他方、対照的なのが植田である。
精神面強化が課題であったが、全日本大会予選会4大会連続出場という実戦を通じての克服を試みた。
第12回関東大会、第21回神奈川大会、第13回東京大会、第8回関西大会における
部蹴武の型において4大会連続優勝という結果をだした。
予選会における植田の型は鬼気迫るものがあり、
全日本蹴武型チャンピオン奪還に燃える情熱と意気込み、
そしてそれを確実にする絶対的練習量は、まさに「蹴武型の鬼」とみなせるのだ。
本年度の植田には勢いがあり、蹴武型の優勝候補筆頭と言える。

だが、野村は、難易度の高い静麗蹴りと流麗蹴りの名手である。
新たに創始され、決勝戦の指定型となる忠武の型（飛び捻り蹴りの型）は難易度の高い蹴り技が多い。
静麗蹴りと流麗蹴り、そして複数の飛び捻り蹴りの華麗さが勝敗を左右するのだ。
野村の忠武の型の完成度の高さ、とくに難易度の高い蹴り技の美しさこそが、
勢いのある植田の優勝を阻む唯一の道となるだろう。

ただ、蹴武の型は選手層が厚い。
仮に植田と野村とが共倒れした場合、高崎健太（前年度全日本大会準優勝、東京江東テコンドークラブ）
や高橋祐輔（高知テコンドークラブ）等の伏兵が優勝をさらう可能性も否定できない。

少年少女部蹴武の型試合の見所

全日本大会初の少年少女部蹴武型チャンピオンは誰か！？

本大会より少年少女部蹴武の型試合が全日本大会正式種目として採用された。

J T Aはもともと他流派とは対照的に少年少女部会員が少なく、試合参加比率も極めて低い。

少年少女部の活性化が組織的課題の一つであるが、ただ単に会員数を増やすという姿勢は望ましくない。やはりJ T Aは本物志向でならねばならない。

たとえ少年少女部とはいえの競技力向上という正道を歩みながら、その活性化をはかるべきであろう。

そこで全日本少年少女部蹴武型チャンピオンという目標を与えることになった。

記念すべき初代チャンピオンの栄冠に近いのは、

菅原風太（東京江東テコンドークラブ）、中村勇太（岡山倉敷テコンドークラブ）、

渡辺直樹（東京江東テコンドークラブ）の3強だろう。

少年少女部らしいさわやかな熱戦を期待したい。